

男女共同参画センターから 起こすさざ波。暮らし続けたい 滋賀をつくる

特定非営利活動法人

男女共同参画をすすめる会・IYOU淡海

世界有数の古代湖・琵琶湖をはじめ豊かな自然とともに生き、自律の精神や進取の気性という気風を培ってきた滋賀県。

その地に、次世代を担う誰もが安心して暮らし続けられる未来を描き、男女共同参画の推進に取り組んできたのが、

NPO法人「男女共同参画をすすめる会・IYOU淡海（おうみ）」である。

滋賀県立男女共同参画センター（GINEETしが）の事業を受託する民間団体として、県や関連組織と連携しながら、性別にかかわらず一人ひとりが自分らしく活躍できる社会の土壌を築いてきた。

これまでの歩みを土台に、YUIみらいプロジェクトに応募。

そこで新たに立ち上げたのが「しがミモザプロジェクト」だ。

企業など多様なステークホルダーが交流・共創できる「しがミモザベース」をはじめ、地域に顕在化するジェンダー課題を住民とともに考えるワークショップや、ユース世代の声を拾い学びを深める「しがミモザカレッジ」に注力している。

地域とそこに暮らす人を大切に思うからこそ、湖面に広がるさざ波のように、ジェンダー平等の輪を広げている。



（上段左から）勝身真理子理事長、久保川雅子理事（下段左から）木村芽久美さん、佐野栄子さん（2026年2月9日最終発表会参加者）



滋賀県近江八幡市、「しがみらいプロジェクト」

<https://i-you-oumi.com/>

県民活動から生まれた、 IYOU淡海

「滋賀県が好きだから、誰にとっても暮らしやすい地域であってほしい」。今、そんな純粹な気持ちから、長年県内でキャリアを築いたメンバーたちが推し進めているIYOU淡海。「淡海」は、琵琶湖を指す言葉だ。滋賀県は、かつては「淡海の国」とも呼ばれ、琵琶湖は、今もなお「母なる琵琶湖」として人々の暮らしに息づいている。

発足のきっかけは、1993年に立ち上がった「滋賀県男女共同参画社会づくり推進連絡協議会」だった。県域の女性団体のネットワークづくりを目的として、県と連携しながらジェンダー課題のヒアリングなどに取り組んできた。



IYOU淡海メンバーと「しがミモザカレッジ」修了生

1999年には、「滋賀県男女共同参画推進協議会」に改組。2004年からは滋賀県立男女共同参画センター（GINEETしが）の貸館管理運営業務を受託。2008年に法人化し、活動が続いている。2024年には、YUIみらいプロジェクトに参加し、若者世代や多様なステークホルダーへの働きかけなど、行政出身メンバーなどの知見を生かした取り組みを展開している。

働く非正規雇用の女性が多い街

滋賀県は、女性の就業率が全国1位を誇る。しかしその裏側には、非正規雇用率も全国トップという厳しい現実が潜んでいる。結婚や出産を機に離職し、再就職時にはパートや派遣など非正規に回歸する、正規雇用率はいわゆる「L字カーブ」を描く形だ。

この傾向は、家庭内の役割分担と密接に関わっている。滋賀県の調査では、男女ともに「夫婦で家事・育児・介護を分担する」ことを理想とする声が多い一方で、現実には、家庭において女性への負担が集中している。結果として女性は安定した正規雇用を維持しづらく、非正規に追い込まれてしまうのだ。

一方で、滋賀県では40代男性の1割以上が週60時間を超えて働いている。男性の育児休業取得率は50%を超えているものの、ジェンダーロール（性役割）に基づく課題を抱える様子は、国内

全体の現状を投影している。

滋賀に「住み続けられない」事情

また、管理職に占める女性の割合も、全国で37位と低迷。IYOU淡海の理事長・勝身真理子さん自身、数少ない女性管理職の一人だった。県の男女共同参画センターに籍を置いたメンバーの高山朋子さんも「一歩先で活躍している女性のロールモデルが少なかった」ことを覚えている。久保川雅子さんもかつて、小学校の校長として活躍していた女性の一人だ。第一線でその道を切り拓いてきたからこそ、次世代には同じ思いをしてほしくない、と切に願い、活動を展開してきた。

滋賀県で特に女性の非正規雇用率が高い要因として、県は次の二つを指摘している。第一に、製造業が多い産業構造だ。製造業は景気変動に応じて人員調整を行いやすく、非正規を多く抱える傾向がある。企業の需要と、働きたい女性の現状のニーズがマッチしていることで、正規雇用が増えづらいのではないかという。第二に、京阪神のベッドタウンとしての性格である。大阪や京都と長距離を通勤する夫に代わり、妻が子育てを一手に担うことで、就業継続が難しくなるケースがある。

こうした背景から、将来を考える女性には、キャリアと育児を両立させる理想的なキャリアパスを描きにくく、県

外や都市部へ流出する。結果として「滋賀に住み続けられない」構造が固定化しているのだという。

バックラッシュを乗り越えて

滋賀県立男女共同参画センターは、こうした課題に警鐘を鳴らし続けつつ、条例に位置付けられた活動支援の総合的な拠点施設として、さまざまなセミナーや研修、情報発信などを行ってきた。

しかし、2000年代初頭に広がったジェンダー・バックラッシュの波は、滋賀県にも及んだ。ジェンダー関連の講演会では抗議が相次ぎ、図書資料室の蔵書をめぐって批判的な声が寄せられたこともある。その経験を経て、対話を通じた相互理解が必要だと



IYOU淡海の理事長・勝身真理子さん

勝身さんは語る。「ジェンダー平等の理念だけだといまだに身構えられてしまう場面があります。そこで、SDGsや地方創生の視点からのアプローチも含め、課題を共有し、共感を広げようとしています」。地域とそこに暮らす人びとを第一に考える姿勢があるからこそ、丁寧に進めてきた経緯がある。

近年は、滋賀県立男女共同参画センターを拠点に、悩みを抱える女性が集える居場所づくり事業なども展開している。そして今、取り組んでいるのが「しがミモザプロジェクト」だ。ユースをはじめ多様なステークホルダーが学び、交流する中で、共感・共創へと「だれもが暮らしたい、暮らし続けたいし、がの未来」に向けて実践していく試みだ。「しがミモザベース」(プレ会)では、



ファシリテーターとして参加する修了生

をテーマに研究し、IYOU淡海の理事も務める富川拓准教授は、ワークショップなどに若年層の意見が入り込む意義を説きつつ、「ジェンダー課題についてはインターネット上での情報など断片的で、体系的に学ぶ機会がない」と実感している。IYOU淡海では、今後大学などと連携し、若い世代との交流をより深めていくことを構想している。

誰もが当事者として考えるために

2025年8月、米原市男女共同参画センターと共催し「みらいワークショップ@米原」を開いた。市男女共同参画センター所長の鰐田知恵子さんによると、地域課題に関心の高い女性議員や学校教員、福祉関係者、民生委員、さらには地元の中高生と、多世代の参加を呼びかけたという。

このワークショップでは、グループごとに「ジェンダーギャップを放置した社会」の最悪のシナリオと、「解消された社会」の最高のシナリオについて、意見を出し合う形で進化した。最悪のシナリオでは「仕事や給与で格差が拡大する」「子どもがいない」「就職の場が近くにない」など、参加者から不安定な未来像が示された。一方、最高のシナリオでは「自然が豊かでいつでも帰って来られる」「すぐに近くに頼れる人がいる」「多世代が集える居場所がある」といった希望が語られ、会場の空気は次第に明るくなっていった。



最高のシナリオ(左)と最悪のシナリオ(右)

ファシリテーションを担ったIYOU淡海の木村芽久美さんは、「さまざまな世代が混ざること、経験値やライフステージによって異なる意見やアプローチが出てきます。ジェンダー課題



最終発表会団体報告の様子

を、まずは自分ごととしてとらえることが大切だと思います」と振り返る。

暮らしを見つめ、潜在化しているジェンダー課題を可視化する。その課題を社会全体で共有し、誰もが当事者として考え、行動につなげる。こうしたワークショップは、行政だけでは生み出しにくい柔軟性と実効性を持っている。実際、県の職員もこれまでのワークショップに参加し、その効果を肌で感じているという。

県女性活躍推進課の佐保田ます美課長は、「金融機関や製造業、地域団体、学生など、まったく違う立場の人たちが同じテーマで意見を交わす。そこで『自分ごと』として考え、行動に移していく。行政の事業ではなかなか実現できないことを形にしているのがIYOU淡海です。異なる立場の人が一堂に会するからこそ、気づきが広がる。参加者が継続的に関わる仕掛けは、行政にはできない強みです」と話す。

次世代を見据えた滋賀の姿

ワークショップの最後には、「最高のシナリオを実現するために、今の自分のできることをアクションプランとしてまとめた。飛び交ったのは、「若者の政治参加」や「教育の充実」、「若者が意見を言える社会」などの意見だった。全体発表を担当した中学生は、「日常の中で、若者の意見を取り入れてもらえて



みらいワークショップ@米原

ユース、企業、経済団体、金融機関、大学、メディア、市民団体、国、県市などが、ともにプラットフォームとしての機能発揮に向けた議論や、具体の取組などを検討している。中でも「役割スイッチ研修プログラム」のほか、「しがミモザサミット2025」の開催など、実践的な展開を図りつつ、広く共感を広げ、具体のアクションへとつながっている。また、2期目を進んでいる「しがミモザカレッジ」では、県内の学生などユース世代を対象にしたリーダー育成を行っている。1期生8人は、今もIYOU淡海が実施するワークショップなどの活動にスタッフとして参加するなど、つながり続けているという。

聖泉大学でジェンダーや男女共同参画



IYOU淡海の木村芽久美さん

いると実感できていません。自ら学校の外に出て行かないとその機会がないのだと思います」と訴える。また、自らの将来を考えた時、県内では「働く場所が限られている」ことも感じている。

たとえば地元が好きでも、魅力的で働きやすい職場がなければ、県外へ出るしかない。勝身さんは、「男性の育休取得をはじめ、働き方改革を進める企業も増えてきたなど、時代とともに働き方は大きく変化してきました。女性の管理職登用が進んでいない県内企業の中には『どう進めたらいいかわからない』という率直な意見も聞きます」と、現状に触れる。

そんな課題に直面する滋賀県の男女共同参画施策を巡って、佐保田課長は次のように話す。「働く場での意識や制



滋賀県大津市にある滋賀県庁

度の変化が、家庭や地域に波及する。だからこそ、企業と一緒に進める必要があると思っています」

「IYOU淡海をハブに」つながる

2015年度、佐保田さんの発案から創設されたのが「滋賀県女性活躍推進企業認証制度」だった。認証基準は32項目あり、1つ星から3つ星までの段階で企業を評価する仕組みで、とりわけ3つ星は「女性管理職比率30%以上」を必須条件とする全国屈指の厳しさを誇る。佐保田さんはこの意義を強調する。「取り組みを『見える化』し、社会に発信することで企業が人材獲得で選ばれるきっかけになる。学生や保護者からも、安心して就職できる会社だと

受け止めてもらうことができるんです」現状に危機感を抱く企業や、県内で増えつつある女性活躍推進認証企業と、地域活動をつなぐことも課題の一つだ。それが、若い世代が働きやすい企業を増やすことにもつながる。さらに認証を受けた企業が社内改善だけにとどまらず、IYOU淡海のような地域プロジェクトへ従業員を送り込む仕組みが生まれれば、波及効果は一段と大きくなる。

佐保田さんは言う。「せっかく前向きに取り組む企業があるのだから、その力を地域と結びつけたい。IYOU淡海のような場をハブにすれば、県の制度と地域の実践を両輪で回すことができるのではないでしょうか。地域に入って多様なステークホルダーを巻き込みながら進められる民間と行政が、役



県女性活躍推進課の佐保田ます美課長



県女性活躍推進課(左2人)と、IYOU淡海メンバー(右2人)

割を分担しながら進めることで、滋賀のジェンダー平等は確実に前へ進むと信じています」。制度や数値目標を掲げる行政と、県民に寄り添い行動を促すNPO。両者が補い合うことで、単発で終わらない「続く仕組み」を目指す。そのために、今後はIYOU淡海を中心に、県内の男女共同参画センターをはじめ、企業や行政など多様なステークホルダーが交流・共創できるプラットフォーム「しがミモザベース」の構築を目指している。ともに事業を実施しながら、「参加してみたらタメになった」と思えるような取り組みを積み上げていきたいと考えている。

人のつながりが未来をひらく

IYOU淡海の活動を支えるのは、制

度や資金だけではない。メンバー自らの足で、一人ひとりに参加を促す丁寧な姿勢や、人から人へとつながる縁である。勝身さんは「やっぱり人が一番の財産。人の力だと思っています。メンバーがた

くさんいるわけではないけれど、少数精鋭のチームです」と胸を張る。今、ここに、表向きの呼びかけだけではなく、対話と信頼関係の積み重ねによって、多様なステークホルダーと共感を広げ、共創につなげようとする動きが、少しずつ広がっている。

さざ波から広がる共創

ジェンダー平等は、一朝一夕ではなし得ない。勝身さんは続ける。「活動に関わった一人の一步だったとしても、50人いれば50歩になるんです」。一つひとつのアクションが積み重なることで、社会全体に波紋が広がっていく。そうすれば、大好きな滋賀を、良い形で次世代に引き継いでいくことができる。高山さんは、「滋賀にずっと住むことを考えている若い子の声を聞き、地元に対する愛着を持ち続けてほしいと思います。ジェンダー平等がそこに寄与していると、少しでも知ってもらえたなら私たちの活動の意味があると思います」と話す。

2025年末に予定しているサミットでは、これまでの実績や若者の活動成果を披露し、賛同者を着実に増やし共感を広げる場とすることを目指している。多様なステークホルダーが一体となり、小さなさざ波が広がり、大きな共創のうねりへと育ちつつある。「ともに考え、ともに動くことで地域の



IYOU淡海の久保川雅子さん(左)、佐野栄子さん(右)



IYOU淡海の高山朋子さん(左)

未来は変えられる」。その信念こそが、活動の根底にある。IYOU淡海の挑戦は、地域に眠る可能性を呼び起こし、滋賀から社会を変えていく力を秘めている。